1986年録音作『スペース・ジャズ・トリオVol.1 』(yvp music) をきっかけとして、イタリアのトップ・ピアニストの座を獲得し、現在ではヨーロッパ最高の実力者の名声を確立しているエンリコ・ピエラヌンツィは、今日活況を呈するイタリアン・ジャズ・ドアー・シーンの核となる存在と言っていい。ジャズという音楽ジャンルにおいて、日本が“輸入盤大国”となって久しく思うが、近年特に顕著なのが新世代を中心としたイタリアン・ピアニストのアルバムがCDショップの店頭を賑わせていることだ。Splasc(h) 、Philology 、DDQ といったイタリアのクレアティヴなレーベルは、新人からベテランまで、数多くのピアニストを紹介しており、こちらの想像以上にミュージシャンの層が厚いことをうかがわせる。中でも実力、実績共に新世代の筆頭格と呼べるピアニストがアントニオ・ファラオ（1965～）だ。ピエラヌンツィからの影響を受けたピアニストも少なくない中、ファラオはオリジナルなスタイルを完成させている点で高く評価できる。

本アルバムの主人公であるステファノ・ボラーニは、このようなイタリアン・ピアニストにあって、急速に台頭してきた才人の１人と言える。1972年5 月12日イタリア、ミラノ生まれ。15歳でプロ入りしたという早熟ぶりを示した。フィレンツェのケルビーニ音楽院を卒業後、イタリアン・ポップスの世界で仕事を行いながら、ジャズ・ピアニストとしても活動。フィル・ウッズ、グレッグ・オズビー、パタロ・フレス、リシャール・ガリアーノ、ハン・ベニンク、バット・メセニー、ケニー・ホイラー、ラズウェル・ラッド、エリオット・シャープ、ジーナ・パーキンス、トニーニョ・オルタ等と共演。参加アルバムは30作を超える。98年にはイタリアを代表するジャズ専門誌「Musica Jazz 」の“ニュー・タレント賞”を、2000年にはイタリアの“ジャンゴ賞”を獲得した。ジャズ、クラシック、エレクトリック／アコースティックの実験音楽等、守備範囲の広い音楽性はボラーニの世代感覚のなせる技と言っていいかもしれない。以下にボラーニのリーダー作を挙げておこう。

1.MAMBO ITALIANO / STEFANO BOLLANI-ARES TAVOLAZZI (Philology)
2.L'ORCHESTRA DEL TAITANIC (Via Veneto Jazz) 1999
3.Rava Plays Rava / Enrico Rava-StefanoBollani (Philology)
4.ABBASSA LA TUA RADIO (In Edicola) 2000
5.HOMMAGE TO BILL EVANS AND JIM HALL /LUIGI TESSAROLLO-STEFANO BOLLANI (Soul Note)
6.IL CIELO DA QUAGGIU (VVJ) 2001
7.LES FLEURS BLEUES (Label Bleu) 2001
8.MONTREAL DIARY /B / RAVA-BOLLANI(Label Bleu) 2001
9.VOLARE (Venus Records) 2002(＝本アルバム)

これらのうち、6.はトリオにギター、アコーディオン、ヴォーカルが加わった編成で、ボラーニの音楽性を多角的に楽しめる。同名のフレンチ・ノベルからタイトルを拝借した7.は、ボラーニのオリジナルが中心のソロ＆トリオ作。優れたピアノ・テクニックと音楽的センスの両面をとらえた秀作だ。8.はこのところボラーニが共演する機会の多いベテランのイタリアン・トランペッター＝エンリコ・ラバとのデュオで、2001年の“モントリオール・ジャズ・フェスティヴァル”におけるライヴ。ラヴァのオリジナルを中心に、2人のメロディアスなセンスが存分に発揮されている。Label Bleuのファンにはお馴染みの写真家ギ・ル・ケレックが撮影したブックレットも同封されており、アートワークも贅沢な仕様だ。　今年、日本でリリースされたボラーニの参加作が２枚あるので、それらも紹介しておこう。１枚はヴィーナスレコードの原盤制作によるエンリコ・ラバ・カルテットの『ルネッサンス』だ。ラバが大きな影響を受けたマイルス・デイヴィスとチェット・ベイカーのレパートリーで構成したトリビュート作でもある。カルテットのメンバーは、ラバ、ボラーニ、ロザリオ・ボナコルソ(b) 、ロベルト・ガット(ds)という新旧イタリアンで、おそらくボラーニが最年少。ヴィーナスは96年にラバのリーダー作『イタリアン・バラッズ』を制作しており、同作はピアノレスでアコーディオン、ギター、ヴォーカルが加わった編成で、『ルネッサンス』とはメンバーもアルバム・コンセプトもまったく異なるものだった。ボラーニを中心に考えれば、「ディア・オールド・ストックホルム」「マイ・ファニー・ヴァレンタイン」「グッドバイ」といった、むしろボラーニが日常的に演奏しないと思われるナンバーに取り組んでいる点が要注目。ジャズの良き伝統に対してボラーニがどの程度習熟しているか、に関しては、十分合格点のレベルに達していたと言えよう。

もう１枚はカルチュア・パブリッシャーズから発売されたジョヴァンニ・トンマーゾ(b) とラバのダブル・リーダー・カルテット作『ドルチェ・ヴィータージャズ・イン・ザ・ムービーズ』(CAM Jazz)だ。イタリア映画のサウンドトラックの老舗レーベルが新しく立ち上げたサブ・レーベルが企画・制作を行った作品で、「モア」「女の香り」等の映画音楽を収録。ベーシストを勤めたメンバーが『ルネッサンス』と同じだが、サウンドのテイストは同作とは異なるのが特色だ。オーソドックスな４ビートよりも、楽曲のオリジナルなメロディを重視した点が聴きどころ。以上２作品は共にエンリコ・ラバがリーダーだが、前掲のアルバム・リストに認められるように、近年ボラーニはラバと演奏することが多く、この1939年生まれのトランペッターから音楽的に大きな示唆を受けていることは間違いない。日本では彼の活動が広く知られてはいないが、今年30歳となるボラーニはすでにリーダーとしてもサイドマンとしても、アクティヴな活動を展開していることが明らかである。

今回登場する本アルバム『ヴォラーレ』は、ステファノ・ボラーニの記念すべき日本デビューとなるリーダー作だ。現在日本ではピアノ・トリオが空前のブームを極めており、ボラーニがこのような形で日本のファンに紹介されることは喜ばしい。共演者のアレス・タヴォラッジ(b) とウォルター・パオリ(ds)は、共にイタリアンだが、詳しいプロフィールは不明で、本国では彼のレギュラー・トリオとして活動している。アルバム・タイトル曲の「ヴォラーレ」を始め、ニノ・ロータやイタリアン・オペラの巨匠、プッチーニ、シンガー・ソングライターのルイジ・テンコ、ドメニコ・モドーニョ等、イタリアの作曲家のペンによる楽曲を集めたのがアルバム・コンセプトとなっている。ボラーニの天性のメロディック・センスとジャズの持つ不変的グルーヴ感が一体となったスリルが素晴らしい。

●イン・チェルカ・ディ・テ

テーマの扱いが意外にパビッシュなので驚く。ピアノのソロに移行しても、ボラーニのアプローチはジャズの伝統的な語法を踏まえたものだ。後半、ピアノ独奏からトリオの合奏へ進んでも、ボラーニの強い意志は不変。

●ヴォラーレ

ドメニコ・モドーニョがアメリカでも大ヒットさせたポップスの名曲。ジャズでもフランコ・アンブロゼッティ、リッチー・コール、ポール・ウィナーズ等のカヴァーがある。この曲がリアルタイムで流れていた当時を知るぼくにとって、これはジャズ・ヴァージョンの成功例といいたい。

●テーマ・ダ・ラ・ドルチェ・ヴィータ

インタールード風にピアノのソロからスタート。ベースとドラムスがイントしてからの展開は、トリオのインティメイトなムードが伝わってくるものだ。

●アーベルティ・トラ・レ・ブラッチャ

このような魅力的な曲、何の前ぶれもなく登場するのが、本作の面白さ。ボラーニはよく声も出ていて、ピアノの演奏も充実している。テーマ～ソロ～ドラムスとの小節交換～テーマの構成もスムーズで好ましい。

●アンジェラ

近年イタリアのピアノ作をウォッチしているリスナーなら、イタリアン・メロディの魅力を認識されていると思う。これもそんな１曲だ。わずか４分でも構成は凝っている。

●アネマ・エ・コーレ

これもバラード。タヴォラッジのベース・ソロをフィーチャーした楽曲全体の構成に、キース・ジャレット・トリオの影を見るのはぼくだけだろうか。ボラーニのバックグラウンドが坦固見えるトラックだ。

●アズーロ

明るいムードのテーマを持つ。ビ・バップからハーピー・ハンコックまでを踏まえたボラーニのスタイルが味わえるが、ここでの立役者は頑丈なドラミングを展開するパオリだ。躍動的なサウンドが最高。

●エ・ルーチェアン・レ・ステレ

全編ピアノ独奏。美しいメロディを持つこの曲はイタリアン・オペラの巨匠、プッチーニの「トスカ」からの曲。Label Bleu盤を聴いているファンなら、このセッティングでボラーニが真価を発揮することを知っているだろう。

●テ・ヴォイオ・ベネ・アサイエ

愛らしいメロディ・ラインを持つナンバーを、ピアノとベースのデュオで演奏する。この曲の魅力を考えれば、デュオ・プレイがベスト、との判断が正しいことを証明。

●アリベデルチ

甘美なメロディを持つバラード。ベースをフィーチャーしており、ボラーニが自分だけではなくトリオの存在感をアピールしたい、との思惑があったことがうかがえる。

2002.8.26　杉田宏樹

---

**Volare**
**ヴォラーレ**
**Stefano Bollani Trio**
**ステファノ・ボラーニ・トリオ**

1. イン・チェルカ・ディ・テ
In Cerca Di Te（Sciorilli-Testoni）(7:21)
2. ヴォラーレ
Volare（Modugno-Migliacci）(4:49)
3. テーマ・ダ・ラ・ドルチェ・ヴィータ
Tema Da La Dolce Vita（Rota）(2:20)
4. アーベルティ・トラ・レ・ブラッチャ
Averti Tra Le Braccia（Tenco）(6:26)
5. アンジェラ
Angela（Tenco）(4:11)
6. アネマ・エ・コーレ
Anema E Core（Manlio-D.Esposito）(5:13)
7. アズーロ
Azzurro（Conte-Pallavicini）(5:42)
8. エ・ルーチェアン・レ・ステレ
E Lucean Le Stelle（Puccini）(3:12)
9. テ・ヴォイオ・ベネ・アサイエ
Te Vojo Bene Assaje（Anonymous）(2:44)
10. アリベデルチ
Arrivederci（Bindi-Calabrese）(6:03)

---

ステファノ・ボラーニ Stefano Bollani《piano》
アレス・タヴォラッジ Ares Tavolazzi《bass》
ウォルター・パオリ Walter Paoli《drums》

録音：2002年7月、8日　ローマ

＊

**Produced by Tetsuo Hara.**
**Recorded at House Recording Studio in Rome on July 7 and 8 , 2002.**
**Engineered by Simone Ciammarghi and David Abbruzzese.**
**Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :**
**Shuji Kitamura and Tetsuo Hara .**
**Front Cover : Roberto Abbate.**
**Artist Management : Mario Guidi Designed by Taz**